

# 論文の内容の要旨

論文題目            神秘劇をオペラ座へ——バルトーク  
とバラージュの共同作品としての『青ひげ公の城』

氏   名            岡   本   佳   子

## 論文の概要

ベーラ・バルトーク (Béla Bartók, 1881-1945) 作曲、ベーラ・バラージュ (Béla Balázs, 1884-1949) 原作による『青ひげ公の城』(1910年戯曲発表、1911年作曲、1918年オペラ初演) というハンガリー語のオペラがある。このオペラの内容はいうなれば一組の男女の心理劇であるが、こんにち頻りに上演されるイタリア・オペラやドイツ・オペラと比較して華やかさに欠け、極めて神秘的で謎めいている。なぜこのような「奇妙な」オペラが誕生したのか?——それが本研究の出発点である。

この問いに答えるためには、作品とともに、20世紀初頭のオーストリア＝ハンガリー二重君主国の都市ブダペシュトへと目を向ける必要がある。さらに本作品が作者2人によって制作された状況に鑑みれば、当時のブダペシュトの音楽文化のみならず、文学、演劇も含めた幅広い芸術活動の文脈で『青ひげ公の城』を理解する視点が重要であるように思われる。

本作品に関する先行研究はすでに存在しているものの、以下の問題が十分に論じられていなかったと考えられるため、本稿では次のような観点から議論を進めていった。

### ① バルトークの当時の人的交流と思想形成

本作品が生まれた1910年代のバルトークの思想は、1900年前後の熱狂的な愛国主義の時期を過ぎて、「コスモポリタン」で左派的な思想へと転換していった時期である。このようなバルトークの変化がいつ起ったのかは定かではないが、この背景に台本作家であるバラージュを初めとする同化ユダヤ人の知識人らからの多大な影響があったことはほぼ間違いない。そのため、当時のブダペシュトのモダニズムという多様で分野横断的な文化的コ

ンテキストと人的交流を抜きにして、『青ひげ公の城』を初めとするバルトークの当時の創作を語ることはできないだろう。

そこで本稿では、バラージュやその友人で哲学者のジェルジ・ルカーチといった当時の同化ユダヤ人を中心とする知識人グループたちからの思想的影響を考慮しながらバルトークの1910-1911年の活動を再検討し、『青ひげ公の城』の作曲を含めた当時のバルトークの思想と創作上の戦略について新たな視座を提供した。

## ② バラージュによる戯曲とオペラ創作との関係

原作者バラージュの功績についてはすでに先行研究でも指摘されていることではある。しかし、そもそもバラージュが書いたリブレットは本来自律した戯曲であったという大前提がなぜかそれらには抜け落ちているように思われる。バラージュの戯曲『青ひげ公の城』はオペラが初演される前に戯曲自体が独立して改訂され、戯曲集『神秘劇集』（1912年）に収められているだけでなく、1913年には「演劇として」初演されている経緯がある。そのため先行研究で前提にされているテキストと音楽の一致という見解はこれらの経緯を見る限り正しくなく、原作戯曲とオペラには、文学と音楽によるドラマツルギーの差異があるということを考慮するべきではないか。本稿では、さらにこのバラージュの戯曲の自律性という観点を、①の問題意識（バルトークの当時の人的交流と思想形成）と関係づけるところまで押し進め、バラージュ側から見た『青ひげ公の城』をめぐるもうひとつの作品論を描くことを目指した。したがって本稿は第1次世界大戦後に映画評論家として知られることになるバラージュの初期活動の研究といえる性格を持っている。

## ③ オペラ史における『青ひげ公の城』の意義

ヴァーグナーやヴェルディのような多大な影響力を持った作曲家とは異なり、また多数のオペラ作曲家を輩出したチェコとも異なり、ハンガリーのバルトークはオペラ研究に組み込まれることが少ないのが現状である。

そのため本稿では、ハンガリー王立歌劇場を中心とした当時のハンガリーにおけるオペラ制作の状況や、西欧の同時代作曲家によるオペラを分析対象として、本作品とバルトークがモデル／反面教師とした作品とのあいだにある連続性と差異に目を向けた。さらにオペラにおいて音楽が台本を表現しているという解釈方法ではなく、②の問題設定と関連させてバラージュの言語のテキストに寄り添いながら、音楽とテキストの作劇上の分岐について考察を進めていった。

以上で挙げた観点に共通しているのは、『青ひげ公の城』における原作者バラージュの重要性である。音楽や戯曲という他分野の芸術を横断して作り上げられるオペラを分析する上で、作曲家だけではなく台本作者への考慮は欠かせない。最終的に本論文は、バルトークとバラージュによる特異な共同作品として本作品を位置付けることを目指した。

## **構成**

本論文の構成は、文化的背景を追った前半部分と、作品分析を行った後半部分に分けられる。

まず第 1 章では、1884 年にオープンしたハンガリー王立歌劇場を中心に、ハンガリーの音楽劇の状況を扱う。とりわけ王立歌劇場のプログラムを分析することによって、本作品が当時のハンガリーにおけるハンガリー語のオペラや音楽劇制作の文脈の中から生まれてきたことを示した。

第 2 章では、これまであまり着目されてこなかったバルトークの分野横断的なネットワーク、そして舞台芸術におけるモダニズムを明らかにする。当時、モダニズムの最有力の文芸雑誌『ニュガト (*Nyugat*)』から逸れていく形で、より社会と関わろうとしていく新しい雑誌が次々と創刊されていた。バルトークとその友人バラージュはこれらに携わりながら、独自の——より急進的な——スタンスを探っていたのである。

後半部分では、詳しい作品分析を行った。第 3 章ではバルトークとバラージュの交流、そして『青ひげ公の城』の成立史を扱っている。このふたつはすでに先行研究によって取り組まれているテーマではあるが、新しく判明した事実関係やバラージュ側の活動も織り込みながら、いま一度彼らの「友情」について整理をしつつ『青ひげ公の城』の成立過程を明らかにした。

さらに第 3 章執筆のための研究のなかで、先行研究では言及されていないバラージュの未整理資料を確認することができた。この資料に基づき、バラージュが生涯を通して描いた「バルトーク像」についての論考を補論「亡き作曲家への「回想」——バラージュによるバルトーク像」として収録している。

第 4 章はバラージュの神秘劇としての『青ひげ公の城』を対象として、これまで十分に吟味されてこなかった戯曲としての成立過程と本作品の「バラージュの活動における」意義を明らかにした。当時の国民的詩人であるエンドレ・アディヤルカーチを初めとする様々な友人との交流のなかで、「新しいハンガリー」の様式を求めてバラージュは戯曲を執筆した。しかしこの作品は当時新しさを売りにしていたハンガリー文壇からすらも受け入れられなかった。

第 5 章はバルトークのオペラを対象に、戯曲とオペラの間にどれほどの差異が存在しているのかを、登場人物の描写とエンディングの改訂に注目して分析した。当時のバルトークは古い民俗音楽と同時代の作曲家たちとの交流によって新しいハンガリー音楽が生まれると考えており、『青ひげ公の城』にはその理念が一定程度反映されている。さらに複数存在するエンディングの場面を分析することで、登場人物であるユディット／青ひげ／城の三者の関係性が戯曲と違いが見られること、さらにバルトークとバラージュの交流がオペラ制作だけではなく改訂にも影響していたことを明らかにした。